

はじめに

『中堅私大古文演習』は、私大専願の諸君のために編集された、極めて実戦的な問題集である。姉妹編の『入試精選問題集 古文』が、国立型、私立型の折衷で、半ば記述式の設問を含む多少高めのレベル設定であるのに対し、本書は、中堅私大突破を目指す諸君に焦点をあてながら、広く私大全般の傾向をとらえられるものとした。主な特徴は次の三点。

- 一、問題は、中位レベルの代表校から、良問24題を精選。対象校を全国の有名私大に求め、入試に頻出の問題文を選び、ジャンルに偏りがなく、しかも全体に設問の様々な分野、パターンを網羅できるように配慮した。
- 二、設問解説の充実に特に心がけた。

私大型の解答形式が簡略な記号型のためか、解説まで簡略な問題集が多いが、本書では、解答経路の懇切な説明、応用性の高い関連事項や文法、文学史など、必要にして十分な説明が施されている。記号や図式、囲みなどをヴィジュアルに、スッキリ内容が汲みとれるように心がけている。

- 三、私大入試に必要な古文知識の拡大をはかった。

文法の識別項目、和歌の修辞法についての説明を巻末にまとめたほか、敬語やその他の重要古語が一目でわかる【本文解釈】、出典解説、古典常識のまとめなど、知らず知らずのうちに古文の知識が拡充できるように工夫をこらした。

一九九九年二月吉日 編者しるす

本書の利用法（問題編）

- 一、24題の配列はジャンル別であって、難易傾斜などへの配慮は特にないので、どこから手がけてもよいわけであるが、設問パターンや解答技法について重複するものは、当然最初の段階で説明されているので、配列順番にコナシて行くことが望ましい。

- 二、一題を約20分で解いてみる。問題量と解答速度の相関、現在の学力を正しく知るために、事前に解説など見ず、辞書の助けも借りずに時間内で解答する。一般に私大入試は、時間が窮屈なことが多い。

目次

12	堤中納言物語	43	24	去來抄	98
11	源氏物語・手習	39	23	無名抄	93
10	源氏物語・須磨	36	22	建礼門院右京大夫集	89
9	大和物語	33	21	讃岐典侍日記	85
8	伊勢物語	29	20	更級日記	79
7	檀園文集	25	19	蜻蛉日記	73
6	徒然草	19	18	土佐日記	69
5	枕草子・百八十二段	15	17	平家物語	65
4	枕草子・二十二段	13	16	増鏡	61
3	十訓抄	9	15	大鏡	56
2	宇治拾遺物語	5	14	榮花物語	53
1	今昔物語集	1	13	西行物語	47

1 今昔物語集

【解答】

問一 エ

問二 ウ

問三 オ

問四 ア

問五 散り敷いた花びらが風に舞う風情をもうしばらく味わって

いたいから。

問六 イ

問七 イ

【本文解説】

土御門の中納言が南殿の前の桜を歌に詠んだいきさつが語られている。土御門の中納言とは、藤原敦忠のこと。敦忠は、平安前期の歌人で、三十六歌仙（平安中期の歌人藤原公任が撰んだ三十六人の優れた歌人）のひとりである。代表歌は、「百人一首にも取られた」逢ひ見てののちの心にくらぶれば昔は物を思はざりけり」。

その敦忠の参内を、春も終わりに近づいたある日、公務で宮中にやって来た小野宮の太政大臣（この当時は左大臣）藤原実頼が待ち望む。南殿の前に咲いた桜の花、それが庭にすきまもなく散り積もつ

て風の吹くたびに波立つように舞う様子があまりにもすばらしいからである。当時は、こういう風情ある光景は、その風趣を解するこのできる者とともに賞美したいと願うのが一般であった。

ちょうどその時、遠くの方から先払いの声が出た。土御門の中納言藤原敦忠が、折よく参内して来たのだ。実頼は、さっそく、この庭の眺めのすばらしさを歌に詠むことを敦忠に所望する。何か特別な、すばらしいことに触れたときには、すぐさまそれを一首の歌に詠み表す、これもまた当時の風流人士の一般的な行動である。しかし、敦忠は躊躇した。目の前にいる人物は当代の和歌の名手藤原実頼である。この人物を前にして、それほどのもない歌を詠むわけにはいかない。が、実頼は左大臣でもある。中納言の敦忠が左大臣の要望をむげに断るのもむずかしい。

しばらくためらった後、敦忠は、「とのもりの……」の歌を詠んだ。今度は、これをうけて実頼が歌を詠み返す番である。ところが、敦忠の歌のあまりのすばらしさに、実頼は自作の歌を詠むことをあきらめてしまう。代わって古歌を詠むことでこれに答えた。が、これは決して実頼の失態ではない。すぐさますぐれた自作の歌が詠めそうにもない場合、その場にふさわしい古歌を代わりに引くことは、なまじ歌を詠むのに手間取ったり、あるいは拙速な歌を詠むよりは、よほどましなことなのである。しかし、古歌の代用はあくまでも次善の策。しかも、実頼は当代きつての和歌の名手であるはずだ。その人物が自作の歌を詠むことを放棄したのである。翻って言えば、

それほどまでに敦忠の歌がすばらしかったということなのだ。そして、実頼さえも舌を巻かざるをえない歌を敦忠が詠んだという、このことが、この話の主題だと言えよう。

【設問解説】

問一 同趣の歌の判定型の問題。

〈解法のポイント〉 見立ての歌

和歌の詠歌法の一つ。

あるものをほかの何かになぞらえてよむこと。

傍線(1)は「桜の花が庭に散り積もって風に吹きたてられているのが」まるで水の波のように見える」ということで、

「桜の花」↓「水の波」という見立て

となっている。

次に、選択肢の和歌をその見立て方に注意して解釈してみよう。

(いずれも『古今集』の歌である)

ア 波の花が沖の方から咲いては散って岸边に寄せているようだ。(花からまず春になる陸上と違って)水上の春と言うのは風がまず春になるのであろうか。

イ 春の野に若菜を摘もうと以前やって来たのに、今回は散り乱れる花のせいで道に迷ってしまった。

ウ 岩間を流れて行く水の白波が繰り返し立つように、私も繰り返し立ち戻ってはこうしてあなたに逢いたいものだ。それでも飽きたらないことだろうよ。

エ 桜の花が散ってしまった風のなごりとして、「水のない空に花びらの波が立つことだ↓」空に花びらが波のように舞うことだ。

オ もし花を吹き散らす風とそれを運ぶ谷の流れがなかったならば、山奥にひっそりと咲く花を誰が見ただろうか、いや、誰も見なかっただろうになあ。

ア 「波」↓「花」の見立て。

イ 見立て無し。

ウ 「石間ゆく水の白浪」は序詞。

エ 「花」↓「波」の見立て。

オ 見立て無し。

アは、(1)の見立てと逆なので、エが正解となる！

問二 敬語復元型の問題。

〈解法のポイント〉 敬意の方向

尊敬⇨為し手(主体)への敬意

謙讓⇨受け手(客体)への敬意

丁寧⇨聞き手(読者)への敬意

傍線(2)「いふ」の主体・客体は、「中納言」・「大臣」である。この二人にはほかのところでは主体と主語となっている場合、尊敬表現されているので、ここでも二人に敬意を表しているほうがふさわしい。また、「いふ」の敬語としては、イ・ウ・エが候補となる。ただし、イの「奏す」は「帝に申し上げる」の意味だから、ここでは不適。ウとすると、「申し」は謙讓の本動詞で客体の「大臣」に敬意を表し、「たまふ」は尊敬の補助動詞で主体の「中納言」に敬意を表すこととなり、この表現として適合する。

エでは、「いふ」の尊敬語だから、主体の「中納言」のみに敬意を表し、「大臣」に対する敬意が表されないので不適。

問三 内容説明型の問題。

〈解法のポイント〉

◎傍線部の前後の会話・思考部に着眼せよ!

中納言が庭の花の美しさを言ったのを受けて、大臣が「それにしては(花の美しさを認めたりには)おそいではないか」と

問四 内容説明型の問題。

〈解法のポイント〉

◎逐語訳から文脈のなかでの翻訳を!

まずは、「すさまじ」の語義をつかもう。

〈解法のポイント〉 すさまじ(形容詞・シク活用)

基本的には、予想や期待がはずれた時のしらけた感じを表す語

- ① 興ざめだ。
- ② 寒々としている。
- ③ はなはだしい。

傍線部の逐語訳をすると、「興ざめな状態で事が終わるのも」となる。そこで文脈のなかでの具体的な内容をつかむために、直下にある「便なかる」の意味を確認してみよう。